

※回答用紙は別に作っています

NIエフワークシート／小学高学年／高校／国語、社会、防災

## 神戸の小学教師・長谷川さん

阪神・淡路大震災で母と弟を亡くした27歳の男性が今春、震災の語り部グループに入った。小学校教師としてあのころの自分と同世代と向き合うようになり、伝える意味に気がついた。「大切な人が一瞬でいなくなってしまうかもしれない。だから『ありがとう』の気持ちを口にしてほしい」。震災20年目の今だから、語れることがある。

代と向き合うようになり、伝える意味に気がついた。「大切な人が一瞬でいなくなってしまうかもしれない。だから『ありがとう』の気持ちを口にしてほしい」。震災20年目の今だから、語れることがある。  
(上田勇紀)

# 27歳 今こそ震災伝える

神戸市立明親小学校の教員、長谷川元氣さん。同市東灘区。3月末、神戸を拠点に、東北など全国で震災を語り継ぐ「語り部KOB E1095」に加わった。きっかけは今年1月17日。同僚に勧められ、初めて全校集会である日のことを語った。

小学2年生だった。東灘区の木造2階建てアパートは崩れ、母親子さん(当時33)と、末の弟翔人ちゃん(同1)がたんのすの下敷きになり、亡くなった。2人の死を知ったのは夕刻。パジャマ姿のまま、上の弟と公園に避難していた。父博也さんがやってきて、震える声で告げた。「あかんかったわ」。ベンチに座り込み、3人で泣いた。しばらくは夢ばかりみた。家族5人で囲む食卓。兄弟げんかをたしなめる親子さん。よちよち歩きの翔人ちゃん…。目が覚めると涙が流れた。

「どうして、もっとお母さんに優しくできなかった

## 母と弟奪った「阪神・淡路」

## 教え子と向き合い 語り部に

んだらう。翔人と遊んでやれなかったんだらう」  
ずっと続くと思っていた日常が引き裂かれ、初めて気付く思い。話を聞いた児童からは「家族を大切にすると決めた」と感想が寄せられた。  
グループ代表で、元小学校教諭の田村勝太郎さん(72)神戸市長田区が、新聞記事で長谷川さんを知り、参加を呼び掛けた。  
2004年から活動するが、語り部は田村さんを含めて60、80代の4人。「体験者の『生の言葉』で、後を継いでくれる長谷川さんに加わってほしい」と話す。  
長谷川さんは「悲しさをだけでなく、聞いた人の今後に生かせるように語りたい」。講演依頼は田村さん(078-771-1815) (ファクス兼用)



語り部グループに加わった長谷川元氣さん(右)と田村勝太郎さん(神戸市中央区東川崎町1、神戸新聞社)

## 高齢化で世代交代が課題 各グループ

阪神・淡路大震災の経験や教訓を伝える「語り部」の高齢化は各団体で進み、世代交代が課題となっている。

兵庫県防災企画課によると、人と防災未来センター(神戸市中央区)には4月1日時点で、ボランティア

の語り部が44人いる。年齢は70代が最も多く22人で、80代以上も7人。50歳以下はまったくいない。

また、10年前と比べると人数は倍増しているものの、ここ数年は40人台で足踏みの状況。新たな顔ぶれを増やそうと、同センターはボランテ

ィアを募集している。

北淡震災記念公園(淡路市)の語り部は、一般のボランティアのほか、職員や元職員も含めて39~84歳の20人で、平均年齢は70歳程度。高齢で辞める人もいる中、新たに始めるのは2~3年に1人といい、担当者は「一般でしようという人が少ないので、職員が語り部をしている」と話している。(高田康夫)